



乗越堤から見た菅井集落

菅井住民の暮らしと水との関わり

井上 洋

伝承と由来

菅井という集落がいつどのようにして出来たのか、その辺のところはつまびらかではない。しかし、菅井の歴史は古く奈良朝時代には既に集落を形成しており、中世には奈良興福寺の荘園として、その支配領となっていたが、近世は菅井村となり、禁裏御料と数家の公家領に分かれ、それぞれの名主、または庄屋が代理管理していた。この制度は明治維新まで続いていたが、明治になって領地は返上、公売に付されそれぞれ個人の所有となり現在に至っている。

地名の由来は、地内の産土神である天王神社境内に菅井と称する清泉があったことによるという。この清泉は、菅原道真が賞したことから菅井と呼称されるようになったと伝えている。

また、我々菅井住民の先人達が居住していたのは現在の西ノ辻ではなく小字古里であるという。通称みなんつじ（南辻Ⅱ宮ノ辻）といって、一段高くなった現住地西ノ辻とほぼ同面積位の畑地があり、その乾の一角に、昔からこじんまりとした篠竹と樹の茂みがあつて、そこに小さな祠があつた。その祠は古宮と呼ばれていた。現在では稲荷神社として小さいながら周囲も整備され、鳥居も多く建てられ立派に祀られて地元信仰を集めている。

先人達は人間生きるに最も大切な水を求めて、ここ木津川のほとりに住み着いたものと考えられる。当時、木津川は堤防もなく自然のままに流れ、大雨の降る度にその流れを変え、木津川右岸の堤防より東の山城町辺りで右へ迂回し、おそらく山裾に沿つて北に向かつて流れていたものと考えられ、大雨毎に左岸が削られて徐々に西へ川幅が拡がると同時に、上流から流れくる土砂のために川床も次第に高くなり、少しの大雨にも氾濫するようになった。その都度、家屋の浸水と同時に土地が削り取られ、川はだんだん西へ拡がりながら移動し、逆に、東の右岸の方は川が砂丘に変貌してますます大きく湾曲する結果となり、豊臣秀吉の時代に堤防が築かれたが、却つて、その堤防が災いを招く事になったと聞いている。即ち、慶長年間（一六〇〇年頃）連日降り続く大雨に木津川が氾濫、曲がり角の菅井堤が決壊、集落は大洪水に襲われて甚大なる被害を受け、再起不能となった結果、西側の高地に移り住んだというのである。

その西ノ辻の西端に高さ七、八メートルの小山があり（稲荷山古墳Ⅱ角川書店京都府地名大辞典）、この地に先ず氏神牛頭天王社を移し奉り、各自宅地を定めて移り住み、一応、集落としての形を整えたのである。地形的に見て西ノ辻は、住宅地としては水害には全く心配のない高地で、たとえ木津川が氾濫し周辺が大洪水となつて

も安心して住める所である。かくして住民は水害の恐怖からは解放されたが肝心の飲料水や農業用水などに関しては、余り恵まれた環境とはいえなかつた。清水といわれる井戸は数少なく、ほとんどの井戸が赤金気水で、住民は飲み水と洗濯、風呂など、日常の生活用水ではかなり苦勞をしており、特に農業用水では個人的には勿論、菅井区としても近隣村との水争い論など、しばしば記録にも残っているところをみると、此の面では大変苦勞を重ねた様子が窺える。

明治から昭和へ

菅井住民は前記の通り、西ノ辻に移つて安住の地を得たものの水との闘いは終わることなく続き、しばしば大きな災害を被つたのである。これは菅井の宿命なのかも知れない。ごく最近まで、その余りにも大きかつた昔の水害の傷跡が歴然として残っていたが、今は立派な住宅団地となっている。小字北ノ堂と馬淵の住宅地がそれである。

此の地は、その昔、安政六年（一八五九年）と明治三年との二回に及ぶ堤防決壊があり、特に明治三年九月十八日の大暴風雨では木津川が氾濫し、吐師堤を始め菅井乗越の北堤が決壊、大洪水となり田畑は勿論、祝園以下数村の家屋数百戸が濁流に浸るといふ大惨状になった。菅井の被害たるや正に目を覆うばかりで田畑の流失計り知れず、被災は何十町歩にも及び大半が池沼と化して、手の施しようのない惨憺たる状態となつてしまつた。特に惨状を極めたのは乗越の北堤決壊の直撃を受けた馬淵と北ノ堂で、その変わり果てた光景は見るにしのびない姿となつていたといふ。



鉄道を経て見た天王神社の杜

馬淵の大半は池と化し、三つの大きな池が出現していた。(後年西淵、中淵、東淵と呼称されていた)北ノ堂は、その土砂が堆積して砂礫の原に一変していたのである。ここは、後年北畑といって、桑園やさつま芋類、野菜、お茶畑として古里の南辻とともに菅井の代表的な畑地になっていた。

その他、古里地区に数力所、鳶ヶ元と柳原地区に三力所と、あちこちに池沼が出来て洵に悲惨なる状況は正に古今未曾有の大災害といっても過言ではなく、菅井村は壊滅寸前に曝されたのである。しかし、村民は一致団結よく困苦に耐え、復興に立ち上がり努力の甲斐あり、翌四年二月からの政府の復旧工事と相まって急速に回復に向かい、人心も漸く落ち着き、次第に明るさを取り戻した。その後、何かと紆余曲折はあったものの、その指導者のよろしきを得て立派に復興を果たし、明治十年には天王神社境内に菅井学校を開設(明治二十二年祝園村に合併廃校)、青少年の教育に当たった。続いて、十八年には修徳社が設立され青壮年の徳育とともに農業の奨励、経営など、村の経綸に寄与、充実した菅井の村造りが出来たのであるが、国の町村制実施に伴い、菅井村は明治二十二年に祝園村に合併される。しかし、明治二十五年四月に粕田、稲田、祝園、山田荘、相楽村の五カ村で組織された組合立精華高等小学校が菅井小字西山に開校され(大正七年学制改革により廃校)地元として何となく活気が出る。ついで、明治三十一年四月には関西鉄道(現JR片町線⇨城河鉄道)が開通となっ



瀬戸川の洗い場

て、いささか文明開花の匂いと明るさをもたらされたが、菅井としては、天王神社への参道を宮前で横切られ、しかも、村を遮断される格好となり、さらに、年を経て昭和三年十一月三日には奈良電気鉄道（現近鉄京都線）が京都―西大寺間に開通して初めて川西地区を電車が走つたのである。しかし、これまた軌道が片町線と平行して建設されたので、ますます幅広く神社と村とが遮断されることになり、危険をも伴い全くいい感じではないがこれも時代の流れであろうか。

大正六年九月末、長雨が続き遂に大雨となり、木津川が増水氾濫、夜来から消防団、その他、区の関係者が出勤して万一に備え警戒に当たっていた。朝になり、堤防から手が洗えるという情報に急ぎ乗越まで走って行った。（小学校一年生の頃）見ると案の定、堤防のすぐ下まで水が迫っており、本当に手が届かんばかりで、（当時の堤防は現在よりは高低かかった）川原の竹藪と畑の柿の木の先端の一部が僅かに濁水の上に見える程度で、見渡す限り（当時は川向かいの上粕の堤防に続いて木津の泉大橋まで一望出来た）一面の濁流が滔々として流れる様は、実に凄い情景で壯観というか、じつと眺めているといろいろな物が流れている。汚い大きな芥に混じって巨大な流木が何本も渦巻く茶褐色の濁流と共に悠々と流れて行った恐ろしいまでの光景は、かなり年月の経つた今でもはつきりと脳裏に浮かんで来る。

なおこの日、祝園村の下流の舟地区辺の堤防が決壊したというニュースがあり、午後になると、濁流は下狛、祝園から逆流、遂に菅井まで押し寄せ、乗越の北堤まで見渡す限り一面の湖と化した。その時、北の方から一隻の小舟に棹さして堤防近くまで来ると、また、北の方へ去って行ったのを覚えている。今思うと、或いは水害の状況視察調査に廻っていたのかも知れない。

明治の大水害以来、何十年振りかで蒙った大きな被害は、かなり広範囲に渡っているのが後で判った。

祝園で思い出すのは、小学校へ通った学校道である。野道（里道）を広くした位の道で、夏は草だらけ（草一面の意味）になるし、ちよつと大雨が降ると直ぐ水浸かりになるところがあつて難儀した。しかし、春ともなると水浸かりの原因となる横を流れる久保田川で、どぶ貝（烏貝）釣りやおぼこで草相撲をしたり、豆笛を作ったりいろいろと道草をくいながら帰った懐かしい思い出もある。今振り返って、大正時代はのんびりとよき時代であつたなとつくづく思う。その道も今は、農免道路として立派なアスファルト道路になり、昔の面影はどこにもない。

大正初めの大洪水から六年を経た大正十二年夏は、対照的に大旱魃となり菅井はまたしても水との闘いとなつた。この旱魃で特に印象に残っているのは、西淵池から早え上がった堀池川にポンプで水を揚げ、川上へ逆流させて、その水を古里や久保田、その他へ送水していた作業風景と共に、西淵の妙な出来事であつた。即ち、ポンプ揚水が始まつた最初の一日、二日である程度水位は下がつたが、その後、何昼夜揚水が続いても最初下がつた水位のままでも少しも変わりのない不思議な現象である。昔から、淵の底は木津川とイケイケ（通々）になつているといわれていたが、やはりそうだったのかと、何か実証された思いがした。事実木津川と繋がっているのかど

うかはさておき、湧水していたのは確かで、昔よくこの池で泳ぎ、体験していることは南から北の端まで泳いで行くと、中央から少し北寄りの一番深い所といわれていた付近で一定の範囲が冷たかったので、恐らくこの辺で水が湧いていたのであろう。

この年九月一日、関東大震災が起きるなど、この二、三年続きの旱魃と合わせ何か不安な数年でもあった。

大正時代の災禍を経て、昭和の御代に改まって以来今日まで、一般的には台風、または洪水、例えば昭和九年の室戸台風、昭和二十五年のジェーン台風、或いは昭和二十八年八月の南山城を襲った（和束町、南山城村）恐ろしい記録的な集中豪雨による大洪水などの災害は、地域的には数多く起きているが我が菅井地区ではその都度何らかの関わりはあっても特記する程のものがなかったのは幸いといえる。

木津川堤防の改修工事も昭和十三年三月に完了し、幅も広く一段と高くなった。現在の立派な堤防が生まれ、古里川の菅井悪水樋も竣工、樋門も新しく取りつけられ、木津川の増水による逆流を防ぐ扉は水勢に従い自動的に閉まる仕掛けで見事な出来栄である。

流石に立派な堤防になつてからは今日まで、増水による氾濫、決壊はなく、特に戦後は上流に高山ダムが建設され土砂の流失が少なく、砂利の採取で川床も低くなった関係で木津川氾濫の心配は皆無となる。さらに古里川も浚渫、改修されて益々排水が良くなり、従来、大雨が続くか木津川が増水すると必ずといっていい程、古里一帯は冠水していたのが、今ではその心配が全く無くなった。また、菅井地区では一番の湿地帯で大雨が降ると忽ち冠水、一面真白くなった久保田地内も近年、祝園地区整備に伴い、久保田川下流が改修されたのでここも大変排水が良くなり、過去のイメージは一変、今では昔語りになりそうな状態となりつつある。

このように、その昔より木津川とはいろんな面で深い繋がりがあり、幾多の苦難の歴史を繰り返して来たが、漸く治水の面でも完成の域に近づきつつあり水との闘いにも終止符が打たれようとしている現在は、将来の展望も誠に明るいものが感じられ喜ばしい限りである。

暮らしと瀬戸川（現堀池川）

かつて菅井住民の命の水でもあり母ともいえる川を村の人々はせど川と呼んでいたが、敗戦後、いつの頃からか堀池川と書いた貼り紙が掲示板に出るようになり当初は馴染みが無かったが、その後、段々と公式名だということでは最近ではどうやら定着して来たように見受けられる。

この瀬戸川は菅井簡易水道に続き、精華町管上水道が出来るまでは生活に一日として欠かせない存在であった。即ち、川を渡って在所に入る言わば菅井村の玄関に当たる橋から上流が、特に日常生活に活用されていたのであるが、現在はすっかり変貌してしまつて草は生え水は汚れ切つて、川というより汚水の排水路といった感じで昔の面影は無い。

そこで、大正から昭和にかけて、最も生活と密着していた頃の風景を偲んでみることにする。当時、岡崎さん宅の裏は川岸まで竹藪となつており、橋と堰の間は大木が茂り藤蔓やいろんな蔓草が枝に絡みつき、川を覆い、時に、道の方まで小枝が垂れ下がっている程の茂みで、子供の頃、アケビを採つて食べた記憶もある。竹藪も川の上に半ばかぶさるように生えていて、大雪の時などは川を跨いで道を塞ぐように垂れ下がっていたため、箒でよく雪払いをしたものである。

竹藪の中にボプラの大木が一本あり、外出の帰りなど遠くからも一段と高く聳え立っているのが見え、菅井の良き目標にもなっていた。西隣りの堀池さん宅裏の川岸には桐の木とあじさい、ゆずり葉の大木が川の上へのびその間に柳が生えている自然の姿で、左岸もまた、土手の幅一メートル余の野道となっており、川幅は現在よりは多少狭かったが、水量も多く、水は綺麗で深く、しかも、土手のあちこちに柳、櫟、桑の木が生えていた上、土止め古い杭があつて深い穴や水溜りが出来て、魚の格好の住処すまかとなり、子供のよき魚釣りや雑魚採りの場となりいかにものんびりと穏やかな田園風景そのものであつた。

しかし、昭和三年開通の奈良電気鉄道の軌道建設の際、鉄橋工事と共に、菅井区の要望により国鉄の鉄橋下から村道までの左岸が、上下二つの堰ともども現在のように改修され、道路は農道として使われていたが昭和九年に産業道路として、現在の府道八幡木津線が村道菅井植田線との交差点から南へ、国道一六三号の間に新設されたので、以後はおのずから小学生の通学路となつて現在に至っている。もつとも現在は歩道も出来て幼稚園児の通園路でもある。

さて、話をもとに戻すと住民、とくに農民は、昔から川の水を農業用水として十二分に利用することを考え、時には一滴たりとも逃さないの心構えで対処していた。それ程、百姓には水は大切であり命水でもあつた。瀬戸川には昔から灌漑用水取り入れのために、五力所に堰を設けて、川の水を田の用水に活用しており雨水不足とか旱魃時には、山の溜池から放流する水路として最大限に利用するなど、瀬戸川は大切な存在で、その点では今も昔と変わりはない。

住民の誰もが日常生活の上でどのように川に親しみ、恩恵を受けていたか、川の水をいかに使い利用していた

のか、一年を通じてその関わり方を振り返ってみようと思う。

川との関係を手短かに記してみると、毎日使う鍋釜を始め、衣服の洗濯、すぎは言うに及ばず、一般的には年中行事、或いは季節的な行事や物事、例えば、お正月やお宮参りなどに搗く餅の餅米洗いは大量に洗うので、水桶とバケツ、それに大きなイカキを用意して川へ行き洗うことにしていた。そのため正月前は一日中賑わい、また、大寒となるとかき餅搗ぎが始まるので、これまた餅米や小米洗いで賑わい、洗い場は終日人の絶えるときがない程であった。年の瀬が迫ると正月の御馳走用の魚の料理からかしわの荒こなしまでもあり、また、水菜とかネギ、大根、牛蒡といった野菜類から芋類など、種々様々な洗い物があつてなかなかの活況を呈した。

季節が変わつて農業関係では、春ともなると苗代の種蒔用の種籾の塩水撰（塩水の濃度は玉子を浮かして三分の一位が水面上に出るのが適度の目安とした）をするのに、各自が四斗樽を持つて来て、川端でお互いに喋りながら賑やかに種籾の選別をしている光景は、いかにも春来るの感じであつた。また、夏の暑い盛り、胡麻を収穫すると川の流れの中でイカキを使って胡麻ゆり（選別作業で充実した胡麻は沈み未生は軽いので浮いて流れる）をする人はかなり多く、水を汲みに来る人もあり様々であるが、胡麻はなかなか手間の掛かるものらしく話を聞くと、高価なものも宜なる哉、と納得がいく。本物の胡麻の味は格別でえもいわれぬ香氣と独特の美味しさがある。

こうして一年を通じて、一日として人の絶えることのなかつた井戸端ならぬ川端の舞台となつたのが、写真に見える堰の上流で、右の端にある長方形の大きな石が洗い場として置いた石で、昔のままの姿であるが、今もなお使われている。堰の下は汚物専門の洗い場と決められ、不文律ではあつたが村の人はこの決まりをよく守り、

決して上で汚物を洗うことはなかった。汚物といつても赤ちゃんのおしめ洗いが主で、さすがに村中のお母さん達はほとんど洗いに来ていた。

このように、赤ちゃん時代から川の世話になった関係かどうか、子供は少し大きくなると川が恋しくなるのか、春から夏になるとチヨコチヨコと走って来ては川に入り、水の中で転んで泣いたり、喚いたり、お母さんが後から追い掛けて来て大声で叱るやら叩くやらで、子供はまた一層大きな声で泣き、喧しいことこの上なし、こんな光景は夏には珍しくないことで、五、六歳頃までは、川遊びは誰でもしたことで、結構楽しかった思い出は大方の男の子は持っているはずである。

夏で思い出すのは衛生大掃除の日の賑わいも忘れられない。

ここでは最後に自分が直接体験して来た川との関係を綴ってみる。

先ず盆栽の水やり。これは祖父の命令で小学生の頃からの日課となり、中学生になって夏休みの日課は家の表道路の打ち水であった。これは道が乾燥して砂埃りが立ち家の中まで入るからで、幸い家の側が川なので直接バケツに汲んで撒くのであるが、広い範囲に撒かないと効果がないのでなかなかの重労働で、暑い夏の日中に大変であった。

しかし、我が家で川の水の恩恵を最大限に蒙っていたのは何といつても風呂の水であった。この風呂の水汲みも自分の担当が多かったが、表道路の水撒きに比べると雲泥の差で、この上もなく楽な仕事であった。何故かという、それは、細い道を隔てて風呂の上に窓があったからで、川から道へ、道から窓へと落差はあったが、窓越しに入れられたためである。しかし、川の水である。一番風呂に入ると時にメダカが浮いていたりして、思わ

ず苦笑せざるを得なかった。今、こうして書いていても当時を思い出すと一人笑いがかぼれて来る。それもこれもみな遠い昔の懐かしい思い出である。当時、風呂の水は川の水を利用する家がかかなり多く、遠い在所の中からも水桶で汲みに来て日向水をする家が多かった。もつとも、冬は冷たく駄目で、自分の家でも井戸水を使っていた。

この他にもまだまだいろんな面で、瀬戸川とは深い関わりがあつたが、水道の普及以来徐々に川の利用は少なくなり、経済の高度成長とともにお互いの生活水準も次第に高くなり、ますます自然との関わりが薄れていく傾向にあるのはまことに嘆かわしい限りである。

我々が愛する菅井の川、瀬戸川は何処へ行ったのか、いや何処へ行くのであろうか……………

生活と水

大正年代から昭和初期も十四、十五年頃までは、その土地の風習や行事は、昔とそう変わる事なく踏襲されていたと思われるので、こうした時代を背景に自分の青少年時代を主体に、当手を振り返り書いてみることにする。

一家の主婦は、朝は一番先に起きて朝の食事の支度をする。庭を掃き、拭き掃除をする。家族が起き、朝飯が済むと後片付けと家の掃除、洗濯。後は雑用その他で、食事の支度以外に以上が主婦の一日となる。次に食関係であるが、我が家の場合を参考にすると、朝と昼はお粥で（御飯にお茶または薄粥をかける）一家が揃って食卓に向かい温かい御飯を食べるのは夕食だけで、副食物は野菜が主体になり塩乾魚とか乾物は常にある程度用意さ

れていたが、季節的な魚の他に、時に生魚の煮付けもあり、たまに牛肉のすき焼きも食べさせてもらったが、子供の頃は牛肉が一番の楽しみな食事で飯も一杯余分に食べる位であった。

流し元（ハシリといっていた）の水瓶に入れる炊事用の水汲みは一家の主婦の重要な仕事であったが、井戸は家の外が多いので連ぶのは大変な苦労であった。特に共同井戸の家の主婦はなおさら苦労が多く、大変な仕事であったと思う。飲み水さえこの状態なので風呂の水は一層厳しかったに相違ない。

大正時代当時、菅井には七十戸近く家があったが、井戸と風呂のない家がままあった。そんな時代であるから水の不便さもあり、各戸共、風呂を焚くのは一月に数える程度で、お互いに貰い風呂で日々を過ごした。つまり、何処の家にも組内（今の隣組）以外に、親戚とか懇意な家があるので、その家とお互いに焚きあうとか、今日は焚いたから内へ来いとかいった具合で、以外と毎日入れるかと思えば、時には、今日は入りたいなと思っても焚いている家がなく入れ無い日も来るので、まんが悪い時は数日間も風呂なしの場合もあったが、今日のように毎日風呂に入る習慣も無かったのでそれ程苦にもならなかった。

何処の家も風呂を焚く回数が少なかったのには大きな理由があったと思われる。それは農家の永い経験からくる生活の知恵と経済的な理由からであった。すなわち、農家は自給自足が原則であるからこの観点から考えると実に合理的になっていた。当時は今のような化学肥料はなく総て肥料は下肥に頼っていたので、先ず、風呂を焚いて下肥を作る。という事は、風呂の水を流すと便所に入るようになっていた。しかし、便所の容積に問題があり、大量に入らないので風呂を制限する他はなく、必要に応じて焚くことになる。この外に、小便は勿論のこと台所の流しから出る排水も溜り場を設けてあり、適当に肥料として使用する工夫をしていたのである。これらの

事情が第一の理由であり、次に水の問題である。前にも述べた通り、菅井は井戸も少なく飲料水には恵まれていなかったのが第二の理由でもある。例えば、菅井の新開地とも言われた瀬戸川地区を例にとってみると、学校があった頃に六軒の家はあったが、井戸があったのは我が家一軒で、他は学校の井戸を使っていた。風呂を沸かすのは大変なことであった。農家には藁を始め籾殻などいろいろ燃料になるものはあっても、冬は大変なので問題となってくる。以上のような事があって、お互いの助け合いで貰い風呂になったのであろう。

なお、風呂とは直接関係はないが、菅井は山が少なく燃料にする松や樺、雑木などは自給自足が出来ずほとんど買う事になるので、農家では共同で山を購入(この場合は立木と下草のみ)、農閑期の一、二月に山行きが始まり、思い思いの組を作って伐採した木を車に積んで帰り、置き場に積み、全部積み終わると一齐に出勤して、長い材木を割り木にする寸法に切り、一同で配分、各自家に持ち帰る方法を毎年繰り返して、一年分の燃料を確保する習わしであった。もともと、自分で山へ行けない家もそれぞれの筋から(山持ちの農家)一年分の割り木と、枝柴、コクマ(枯松葉)を買い、家まで着けてもらうようにしていた。

次に、娯楽と風習の方を思い浮かぶままに記してみよう。

まず、正月である。迎春にはいろいろな準備が必要で、家の内外の清掃、整備から、神佛の祭器の手入れ、注連縄ない、華(びしゃこ、櫛)切りと、門松や新土を山へ取りに行き、三十一日には門松立てと墓へ新土を持って行き、餅、みかん、干柿、華をお供えして帰る。それから風呂に入り一年の垢を落とし新しい着物に着替えて気分を新にして、注連縄の飾り付けと神佛へお供えをした上、家の周りの庭や道に浄めの新土を撒くと、一先ず完了である。明るい内に家族揃って年越しうどん(そば)を食べ、早めに夕飯を済ますと後は、新年を迎えるだ

けとなる。時間が早いので一家団欒の楽しい一時を過ごす絶好の機会となり、一年を振り返って四方山の話が出るかと思うと、時として両親なり身近な人の昔話やいろいろの思い出話なども出て、今日でいうコミュニケーションの良き場となり大変人生勉強になった。

今日ではテレビがあるので前記のように落ち着いて一年を振り返る暇もなく、紅白歌合戦などを観ていると直ぐ時間がたち、もう除夜の鐘かと言うぐらい早く感じるが、昔は十二時まではかなり長い時間帯であった。それでいろんな遊びをして時間を過ごした。百人一首、いろはかるた、双六、花合わせ、トランプなどが主なものでカブ、オイチョコといった賭博的なものから囲碁、将棋を静かに楽しむ人と様々で、その外、他所の在へ行くとか、近所の娘さんの家へ遊びに行く若い衆など、それぞれ結構楽しく時を過ごしながら除夜の鐘を待ったのである。

この界限では、除夜の鐘は植田の来迎寺の鐘を百八つ鳴らす事になっているが、最初の鐘の音が響くと男達はもう競争で一斉に我が家へ急いで帰る。正月の雑煮は男が炊くことになっており、餅焼きをするためである。雑煮は白味噌雑煮で、具は大根、人参、豆腐、油揚げ、小芋（里芋）、それに頭芋を入れて作り大晦日に下炊きしてあるので、炊くといつても元日にはただ熱く温めるだけで、一家の主が豆木で炊く習慣になっている。餅も焼け、雑煮の準備が出来ると、先ず、神佛に供え、若水を汲み上げて供え、お燈明を灯して家族揃って禮拜、新年のあいさつと共に感謝と希望を祈念、四方拝をしてから各自のお膳の席につき、新年おめでどうのあいさつをしてお雑煮を祝った。正月の雑煮を祝う三方日だけ、一人用の高膳に立派なお碗を使っていたが、これは所詮、祝い膳で最初のお碗に大きな頭芋を入れたのは、鶏頭になるとも龍尾となるなかれ、の諺の思想から来た親心と言うか

願いがしきたりとなって今に続いているのであろうか。また、餅も同様で一日から十五日の小正月までの雑煮の餅を食い上りすると出世が来ると聞かされたことがあるのと符号するように思われる。

雑煮を祝い終わると直ぐ家族揃って氏神さんへ御参りするのが建前であった。

初詣での暗夜に燈明の明りではのかに浮かぶ朱塗りの本社殿の姿は、正に幽玄の世界を想わせ社頭に額づく時、思わず身が引き締まり敬虔な祈りの境地に誘われる。氏神天王神社の初詣は最高である。年頭に当たり村中の安泰と家内安全を祈念して清々しい気持で家に帰り、ユックリとお昼頃まで寝るのが一般的な元日であった。

一日には、国旗を立て元旦を祝ったが神社詣以外はあまり外出せず、家で静かにしているのが建前で二日からあいさつ廻りをするようになっていた。二日はお年玉の日でもあり子供には一番嬉しく楽しい日であった。

子供の遊びは、男は凧上げ、女の子は羽つきがやはり多く、綺麗な着物を着せてもらってニコニコと遊ぶ姿は正月ならではの長閑な風景であった。

正月の三日目を人々は雑煮を祝い御馳走を食べて楽しく遊び、ユックリと休日を味わったのである。昔の童唄に「正月三日何嬉し雪より白いママ食べて割木のようなトトそえて云々」この唄は何時の時代かは不明であるがその昔に、このような唄がうたわれていたと聞かされて、いかに農民が貧しい生活を強いられていたのかと思えば、当方でさえ自分等の有難さを痛感したものである。昨今はグルメ時代とか、正に天国か極楽浄土と言うべきである。

数え年十五歳になった男子は五日に修徳社、青年団、火防組の三つの組織に入る事になっていた（半強制的）、消防の出初めが主体でポンプの試運転後、集会所で新年宴会を開く年中行事で、人員構成は十五歳から三十五歳

で序列は生年月日順となり、最年長者が長となつて総ての指揮を取る仕組で、当時は長幼の区別は厳しく絶対的な封建時代なので新人生は大人の顔色を窺いチリチリしていた。十五歳の新米の仕事はポンプのホース洗いとスキ焼用の野菜の準備と宴会時の給仕である。野菜は水菜とネギで年長者の畑で調達準備する。ホース洗いや野菜洗いは十五歳の小生には生まれて初めての経験で、手が痺れて痛い感じの水の冷たさと、酒から御飯の給仕までして、皆さんの食事が終わった後で残り物で飯を食べ、そして、箸をおろすなり後片付けをさせられた辛かった思い出は、今もなお鮮明に残っている。

二月の節分には鰯の頭を終の小枝に刺し、家の入口に差す。夕食には必ず鰯を食べる。(これは今日も行っている)「鰯の頭も信心から」などと言いはやされるが、何でもいい、自分が信じさえすればそれが一番きく。つまり、信念を持つての諺で、各家庭で夕食後氏神天王神社に参拜、豆をお供えて代りに神前に供えられた豆をいただいて帰り、自分の数え年より一つ多い数の豆を食べて年をとる。福は内、鬼は外、と唱えながら豆を撒くのであるが、子供の頃は朝起きて拾うのは嬉しいことであつた。この日、小学校の一年生から六年生までの男の子は全部早夕飯を食べてお宮さんへ行き、本社前を始め各末社の賽銭箱のお守りをする(これはお供えの豆をもらう権利)ことになつていて配置も決められていた。すなわち本社前の大きな賽銭箱は六年生が占め、南側の末社熊野神社より北側の天満宮と、五年生以下順次配属され、一年生は拾い子といつて本社の前拜殿に撒かれた豆を拾う役で、拾った豆は自分ももらうことになり、結構、子供なりに楽しかった。しかし、この行事も大戦末期に中止となり、戦後は廃止された。

三月九日には、天王神社の祈念祭があり、恒例の祭典の外にこの日は御田祭とも称し、松のしんを供え神楽勤

めをして豊穰を祈願し、苗代の種撒きをした際、この松のしんの一部を頂きいろいろな花と共に苗代に飾りつけ、豊作を祈念したとも聞いている。

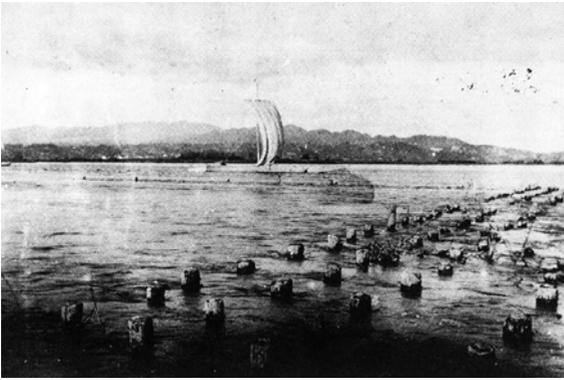
四月三日の神武天皇祭と十月十七日の神嘗祭は国の祝日であったが、菅井ではいずれも春の祭、秋の祭としていたので、前日の宵宮から翌日の後宮までの三日間、天王神社への参道と境内の五カ所に御神燈を立て各戸にも御神燈と書いた大きな提灯を表の軒に吊し、三日間、夜は火を灯してお祭り気分を出したが、当日神社で祭典があるのみで神輿が出るような行事はなく、所詮、居祭りであるが、餅を搗き、すしを作り、鶏をつぶし、かしわで一杯、といった具合で、結構御馳走をして親戚を招待したもので、来ない親戚にはすしや餅を届けに行くなどしていた。また、山がえり、といつて、おすしや御馳走を持って山へ行つて食べたり、子供も大人もそれなりにお祭り気分を味わっていた。春祭と秋祭の違いは、春は小豆餅、秋は鯖ずしと言う位のことでは他は変わることがないが、秋祭の鯖のすし作りは大変な仕事であったと思う。昨今と違って当時は大量に作った上、鯖も今のような生の上等でなく一塩は余程上等の方で、大抵辛い塩鯖で作っていたので主婦は酢漬と骨抜きに手間がかかり、また、竹の皮で一本ずつ包装するのは並み大抵でなく、出来たすしを纏めて重しをかけるなど、相当苦勞を重ねて作った。その代わりにかなり長い間食べていたようである。日数がたつて黴が生えたり御飯が堅くなったのは焼いて食べたようにも聞いている。

さて、この辺で話題を遊びに変えてみよう。

先ず、第一番に浮かんで来るのは兵隊ごっこである。小学校に入る前か入った頃で、第一次世界大戦が終わった直後だった影響か、何年間か続いて流行していたので最も印象に残っている。連隊旗も勲章もあつたのだから

たいしたものであった。

次は輪回しで、これは回すと言うより転がすと言う方が正しい。実際に使って遊んだ者でないと判らないと思うので説明を省くが、鉄の輪を細い鉄の棒で転がしながら走り廻る遊びで、走る運動には最適の遊びと思う。幸い菅井には鍛冶屋さんがあったので、輪と棒とも自分の好きなサイズに作ってもらえたので大流行し、こればかり長年続いた。



「しがらみ」の見える木津川

それからパン返し（メンコ）も流行した一つで屋内の土間はピタリと坐りが良いので最適の場所で、友達の家で毎日のように遊んだ記憶がある。

その他、流行した遊びは、竹馬、竹トンボ、杉鉄砲に紙鉄砲、外にバイや独楽回しなど数えればきりが無いが、雨の日などは将棋やかると、トランプ遊びをよくした。女の子はどうだったのだろうか、よくわからないが、縄跳びや手鞠つきが多かったし、おいちこや綾取りなどよく見かけたように思う。それに春から夏となると魚釣りや雑魚取りが始まるが、竹で作った水鉄砲も流行した一つで、遠くへ飛ばし合いをして自慢しあったりもした。思い出は多いが、夏は何といっても水泳である。小さい頃から泳いでいたので自分はよく泳げた方だった。夏休みなどどちらが黒いかと友達同士で比べあった思い出もある。当時は大川（木津川）で泳ぐのが常で、

水は綺麗だし、第一、広々としている上にしがらみがあつて変化に富み、そこには、いろいろな魚が泳いでいた。時には、潜つて魚取りをしたがガラスを透して見る水中は実に綺麗であつた。なお、最近の新聞紙上で淀川の枚方付近でアユモドキという魚がみつきり貴重な淡水魚で保護云々の記事を読んだが自分達の頃にはよく取れた魚であつたのを思い出した。他にも、浅瀬の綺麗な流れの砂の中にいるスモダという魚が取れ（この魚は沢山いたので専用の道具で取る人もいた）焼いて、醤油をつけて食べると実に美味しい魚であつた。こうして大川ではただ泳ぐだけではなく、いろいろな遊びが出来たので退屈することなく面白く夏の遊びには最高の所であつた。

菅井の浜には、渡し舟があり、時に帆かけ舟が岸に繋いであつたが、乗つてみてその大きいにはびつくりした経験もある。小学校も高学年になると西溯へもよく泳ぎに行つたが、西溯を往復すると一人前といわれたので、時たま泳いでみることもあつたが、大川のことを思うと水はなま温かいし不透明なので、あまり気持ちよくなかつた。

最後に、忘れられない子供の頃の思い出として、瀬戸川の雑魚取りについて話してみたい。替取りと言つて、川の水をすつかり無くして魚を取る方法である。福井松次郎と言う私の両親と懇意で自分を可愛がつてくれた雑魚取りの好きなお爺さんが、年間幾らで川を請けていたため、農業用水の必要な時季以外は自分の好きな時にいつでも取れるのである。いつも「ボン、雑魚取りやぞ」と、言つて誘つてくれた。二人だけの雑魚取りは魚も沢山いるし、人に取られる心配もなく、自分の思うように取れ、最高に嬉しかった幼年時代の生涯忘れられない懐かしい思い出である。このお爺さんの思い出はこの外にもいろいろあるが、福井のお爺さんより遙かに高齢になつ

た自分を今振り返りうたた感慨深いものがある。

菅井簡易水道

菅井区は、飲料水については恵まれた環境ではなかったため、住民は常に水には強い関心を持っていた。戦後十年を経過して漸く敗戦の混乱より立ち直り、経済的にも安定に向かいつつあった昭和三十一年頃、この際、昔の夢であった水の安定確保を目指すべきと痛感された数名の方が話し合い、昭和三十二年正月に有志として相集まり公式に生活改善と衛生思想の普及を目標にして、水道を作る事を決意、目的達成に努力する事を盟約、直ちに活動に移った。各隣組長を通じて各戸に主旨を説明、協賛を求められた。その後、何回となく集会を開き紆余曲折はあったがほとんど全戸の賛成を得て、昭和三十二年八月十八日に菅井簡易水道組合が設立され、昭和三十三年四月に水源試掘に成功、昭和三十三年八月に京都府より水道事業の経営許可が下り、昭和三十四年一月より正式に水道敷設工事に掛り、同年五月に工事完了。ここをめたく菅井簡易水道は竣工したのである。

かくして、各家庭に送水され、長年希求待望の綺麗な水の夢が実現、区民は歓喜雀躍、漸く文化の道を歩むことになった。

昭和三十四年十二月に記念碑を建立して水道建設の功労者を顕彰するとともに、区民の喜びを後世に伝えることになった。しかし、町営水道の完成により昭和三十六年十月一日に町水道と連結され、菅井簡易水道は町営水道の一部として生まれ変わったのである。

おわりに

こうして、水道が出来て昔からの水の不安は解消され、暮らしと水との関わりは、さらに密着一体化して日々の暮らしを楽しくさせ、特に精華町の水道は地下水のため、水質、ことに良く、天下一品の美味しい水道水と自負しており、今度はかえって水に恵まれた環境に一変した思いで、私は感謝と喜びの日々を送っている次第。折からこの度、町史に協力するという機会を得たので、変遷の激しい昨今の世相に鑑み、身をもって体験してきた昔の（大正・昭和初期）暮らしの真実の姿を後世に伝える義務というか、責務を感じたので、あえて非才をもかえりみず、拙文を弄した次第。もし幸いにして後日これを読まれた人たちに、昔を偲ぶよすがとなり、さらには郷土愛に徹した先人たちの尊い姿勢が、万一、現代人にも伝わる一端ともなれば、これはもう筆者の望外なる喜びである。